

セラピーで陥りやすい過ち

2008/07/21 神戸定例会

藤坂龍司

1. うまくいっていないセラピー

<注意散漫>

- ・子どもが注意散漫。教材を見ない。指示をきちんと聞かずに、いい加減に反応する。お手つきが治らない。
- ・最初の数試行は正解するのだが、途中でがくっと正解率が落ちる。10試行のランダムローテーションがなかなかクリアできない。

<言うことを聞かない>

- ・セラピーしようとする、子どもがぐずって、部屋に入ろうとしない。入っても椅子に座ろうとしない。無理やりすわらせようとする、かんしゃくを起こす。
- ・椅子にはすわるが、長続きしない。すぐにぐずりだし、立とうとする。物を投げる。テーブルをひっくり返す。脱走する。攻撃してくる。

<課題が進まない>

- ・新しい課題がいつまで経ってもクリアできない。これがこの子の限界なのだろうか。

<般化できない>

- ・自分だとできるのだが、ほかの人にやってもらおうと、できない。
- ・私の言うことは聞くが、幼稚園・保育園では、先生のいうことを全く聞かない。

2. 対処法 Q & A

(1) 注意散漫

Q. 子どもが注意散漫。教材を見ない。指示をきちんと聞かずに、いい加減に反応する。

A 1. 強化子が弱いのでは。トークンがマンネリ化し、効き目がなくなっているなら、お菓子などをほんの少しずつ毎回与える方法に切り替える。ごほうびを間引いて、ほめ言葉だけになっている場合も同じ。毎回強化子を与えているのに、注意散漫な場合は、その強化子を与えすぎて、飽きてしまっている可能性がある。別の強化子を探す努力を。

あるいは強化子の力を強めるため、その強化子を日頃は与えないように気をつける。お菓子なら、満腹時のセラピーは避ける。1回のお菓子が大きすぎないか。例えばアポロンを半分ずつあげるのではなく、1回一かじりだけにして、アポロン半分を5～8試行持たせる。

A 2. 修正を許しているのでは。間違ってもすぐに修正させ、正解させていると、注意深く正解を選ぼう、という気は起こらなくなる。お手つきは認めず、お手つきしたら、すぐに手を差し戻して、心の中でゆっくり5つ数える。それからまた指示を出す。

A 3. パターンを読まれているのでは。2つの物の名前を区別させる課題で、いつも交互に名前を言っていないか。3つの教材の区別なら、いつも左から右に順に言っていないか。パターンを変えて、見なければ正解できないようにする。

A 4. 教材を見ない→正解できない→強化されない→やる気が出ず、教材を見ない→正解できない・・・という悪循環に陥っていないか。悪循環を断ち切るため、まず教材を見させる工夫を。例えば、教材の近くで強化子をちらつかせる、1回ごとに教材を引っ込めてまた出す、教材を子どもの視野の範囲に集める、など。そして教材を見たら正解できる程度のプロンプト（正解を指さすなど）を与えて、正解させる。手を取って正解させると、見なくても正解できるので、あまり好ましくない。

Q. 最初の数試行は正解するのだが、途中でがくつと正解率が落ちる。10試行のランダムローテーションがなかなかクリアできない。

A 1. 10試行すべてに同じ強化子を同じやり方で与えていないか。そうすると徐々に効き目が落ちていくので、最後までモチベーションを維持できない。野球で先発投手が完投するのが難しいようなもの。そんなときは、後半尻上がりに強化子をグレードアップしていくこと。例えば後半、とっておきの強化子に切り替える。ほめ言葉も後半尻上がりにテンションを上げるようにする。野球で言えば、7回からとっておきの抑え投手を登板させるようなもの。

A 2. セラピーが間延びしていないか。試行のテンポを速くすることも大切。間延びすると集中力が持たない。また集中力が落ちてきたな、と思ったら、得意な音声指示を1回挟んだりして、目を覚まさせる。

(2) 子どもが言うことを聞かない

Q. セラピーしようとする、子どもがぐずって、部屋に入ろうとしない。入っても椅子に座ろうとしない。無理やりすわらせようとする、かんしゃくを起こす。

A 1. ぐずったときに、ついひるんで、しばらくもたついていないか。そうすると、ぐずりを強化することになり、ますますセラピーの度にぐずるようになる。ぐずってもまったく手をゆるめず、たんと椅子に誘導して、セラピーの流れに乗せるのが大切。椅子に座ろうとしない場合は抱き上げて椅子にすわらせる。このときしっかり胴と足を90度に折ってだっこしないと、足を椅子に突っ張ってしまい、すわらせられなくなる。もたつくと抵抗がさらに激しくなり、集中がつかなくなるので、決してもたつかないこと。すわらせたら、逃げ出さないように手を伸ばしてひざのつけ根のところを抑えながら、テーブルの反対側にすわり、両足を伸ばして椅子ごと挟むようにする。

A 2. かんしゃくに対して譲歩していないか。かんしゃくを起こしてもすぐには立たせず、簡単な課題をプロンプト付きで1回でも正解させてから立たせる。30秒ほど休憩させて、また椅子に座らせ、同じことを繰り返す。プロンプトなしでその課題に正反応できるまで続ける。

A 3. 魅力的な強化子を用意しているか。強化子に魅力がなければ、セラピーを嫌がるのは当然。

Q. 椅子にはすわるが、長続きしない。すぐにぐずりだし、立とうとする。物を投げる。テーブルをひっくり返す。脱走する。攻撃してくる。

A 1. 子どもの要求を聞きすぎているか。一つの強化子が気に入らなくて、ほかの強化子を指さしたりするとき、毎回それに応えてやろうとすると、どんどん要求がエスカレートしていく。こちらが「次の強化子はこれ」とあらかじめ決めたら、本人が気に入らなくてもそれを与える。拒むのなら何も与えない。もう一試行し、強化子として席を立たせるだけにする。

A 2. 子どもに隙を与えていないか。ぼんやりしていると、隙を見て教材を投げたり、椅子から脱走したりする。常に油断なく身構える。教材は投げられないように、手でしっかり押さえておく。両足を伸ばして椅子ごと足ではさむ。さらに左手はいつも子どもの右のふとももに軽くおいて、立ち上がろうとしたらすぐに止められるようにしておく。つかもうとしてきてもつかめないように、いつも子どものリーチの外にいるようにする。

(3) 課題が進まない

Q. 新しい課題がいつまで経ってもクリアできない。これがこの子の限界なのだろうか。

A 1. そうかもしれない。でも簡単にあきらめてはいけない。子どもがうまく学べないとき、まず行なうべきことは、子どもの能力不足のせいにするのではなく、自分の教え方に問題があるのではないかと反省して見ることである。

まだ教え方の工夫が足りないのではないか。一つの方法でだめなら、別の方法を試してみる。例えば物の名前がいつまで経ってもわからないとき、教材を変えてみると、意外とすでに知っている物にぶつかることがある。上下を教えるとき、テーブルの上下ではいつまで経ってもできなかったけど、しゃもじを持たせて上に持ち上げたり、下に下げたりするやり方に変えたら、簡単に習得できたりする。あるいはその課題をクリアするための前提となる基礎スキルが足りないのかも知れない。回り道のようにも、基礎スキルからもう一度やり直すと、あっさり壁を突破できることもある。一つのやり方で1、2週間屋ってダメだったら、やり方を変えてみることに。

A 2. 子どもの注意力を高める工夫が足りないのではないか。強化子にノリが悪いときは、強化子をちらつかせて、子どもがそれに食い付こうとした瞬間にパッと引っ込めて指示を出す。テーブル上の教材をちゃんと見ようとしないときは、いったん教材を撤去して、1回ごとに教材をパッと出した瞬間に指示を出す。

A 3. その課題がまだ早すぎるのではないか。いろいろやってみてもやっぱりクリアできないとき、しばらくその課題を寝かせておいて、数ヶ月後に再挑戦してみると、うまくいくことがある。正攻法ばかりが能ではない。

(4) 般化できない

Q. 自分だとできるのだが、ほかの人にやってもらおうと、できない。

A 1. 無意識のうちに何かヒントを与えているのではないか。 指示を出すとき、正解の方をちらっと見てはいないか。間違いの方に子どもがさわろうとしたとき、つい身体が動いてしまっていないか。正解の方に身体が傾いていないか。正解をさわろうとしたときは顔がほころび、不正解にさわろうとしたときは渋面になっていないか。あるいは指示の出し方がワンパターンになっていないか。例えばいつも交互に指示を出していないか。ほかの人にやってもらってできないときは、まず自分のやり方を見直す必要がある。

A 2. あなたが上手になりすぎたのではないか。 あなたは子どもの癖を知り尽くしていて、どうやったら子どもの注意を高めることができるのか、どういう指示の出し方をしたら子どもが反応するかがわかっている。ところが他の人にはそれがよくわからないので、子どもの能力を十分に引き出すことができないのかもしれない。そんなときは方法が二つある。一つはほかの人（例えば父親）にも上手になってもらうこと。つまりなるべくあなたと同じような教え方をしてもらおう。もう一つはあなたが「下手」になること。つまり子どもがいったん課題をマスターしたら、徐々に普通の人への指示の出し方に近づけていき、それでも子どもが反応できるようにする。

Q. 私の言うことは聞くが、幼稚園・保育園では、先生のいうことを全く聞かない。

A 1. あなたの指示の出し方が命令口調になりすぎているか。 最初は「立って!」「バンザイ!」などと紋切り型の指示を出すのが、幼稚園に入る頃になったら、徐々にソフトで自然な言い方に変えていく必要がある。「立ってごらん」「立ちましょう」「〇〇してみようか」といったいろんな語尾の付け方にも慣れさせる必要がある。また日頃子どもと生活しているうちに、つい言い方が脅し口調になってしまうことがある。そうすると、叱られるのが怖いからお母さんのいうことは聞くが、先生のいうことは聞かない、ということになりがち。その場合も、だんだん優しい口調に改めていく。

A 2. 全体の指示を聞く練習が足りないのではないか。 いつも一対一のセラピーばかりをしていると、面と向かって個別に言われた指示にしか反応しなくなる。そうならないためには、家で家族の協力を得て、幼稚園ごっこをやってみる。一人が先生役になり、ほかは園児のつもりで一列に横並びにすわる。先生役が全体に指示を出し、それに全体が従う。お子さんのそばには誰か一人ついていて、プロンプトする。できればそれだけでなく、実際に集団の中にはいるとき、少なくとも最初のうち親かセラピストがシャドーにつくことが望ましい。